

花開院家とぬらりひよんの孫

よしの桜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

阿部晴明戦が終わった後、花開院家は京都に、奴良リクオは東京に元の生活へと戻っていった。

戦いで得た友情は、その後も続いていくものです。

陰陽師一家と妖怪の友情物語をご覧ください。

目次

ぬらりひよんのカン	1
新・祢々切丸の攻防	7
リクオ、家出する	11
妖の宴	15
地獄の沙汰も妖しだい	20
妖の恋愛事情	26
ゆらとリクオの学生生活（前編）	36
ゆらとリクオの学生生活（後編）	43
妖の子育て事情	51

ぬらりひよんのカン

阿部清明の鶴騒動が終わり、半妖の里から奴良本家に帰って来て宴が終わり一安心したりクオはふと気が付いた。

そういえば花開院さん達、宴に来ていたなかつたなど。

宴に来ていたら話をしようと思っていたんだよねと時計を見る。

朝の11時。

お昼には早いけどちよつと携帯でお話する位は良いだろうとゆらの電話番号を押す。

コール数回で出たゆらの声は元気だった。

『なんや奴良くん、中途半端な時間やな』

「うん、ちよつとお話したくてね、今どこ？」

学校だったら悪いと思つて訊くと花開院本家で休憩中だというのでほつとして話を続けることにした。

「えつと、今花開院のみなさんもいるのかな？」

『うん、いるで。竜二兄さん以外なら』

「…….」

『あれ、奴良くん無言でどうしたん？ 兄さんに話だったん？』

突如声が聞こえなくなつたので、いぶかしげな声を出すゆらには見えなかつただろうが、リクオの前に座っていたつらは見ていた。

突如立ち上がったリクオの瞳が輝き、にっこり笑っている事を。

「絶対花開院さん達、特に竜二さんには話したい事があつて！ あ、でもアポとつていないから失礼かと思うけどすぐ行くから内緒で竜二さんの居所、探ってもらえないかな！」

『…….なんで内緒？』

「うん、そうした方が良いつてぬらりひよんのカンが囁くから！」

『納得いくようないかないような答えやな…….』

つららは引きつりつつも急いで支度と護衛選別の為に席を立つ。

新幹線の予約に護衛達と共に一泊できるくらいの荷造りを指示している、黒田坊と青田坊が近寄ってきて小さな声で囁く。

「若の顔、昔のいたずらする時の顔そっくりなのだが」

「そうですよね、そう見えますよね、私の気のせいじゃないですよね」
「いいじゃねえか、それが若なんだからよ」

「まあ、そうなのだが」

きつといたずらの矛先は自分達じゃない花開院の誰かなんだろうから。

一方、花開院竜二は疲弊していた。

同級生のアサミは竜二の隣で満面の笑顔で竜二が買って来てくれたクッキー缶数個を持つているのとは対照的に。

「わからん。クッキーに何の差があるんだ」

「だから言ってるじゃん、4つの支店でちよつとずつ柄が違うんだって。これを机の上に並べるのが夢だったんだ」 販売10分で売り切れるから4回来園しないとダメだと思ってたから嬉しいの」

「お前・・・俺らは受験生だぞ、わかってるのか」

「だから、大学生になってからと思ってたんだって」

夕方6時開店の土産店を狙っていたので、もう日が落ちている。

3時からつきあって式神言言も使ったので精神的に疲労していたが式神を使ったお礼でアサミに夕食を奢ってもらったのでもういい時間だ。

京都はらせんの封印で妖怪的には安全が守られているが、女子高校生1人が夜歩く街としては不用心と言う物だから、家まで送るのはやぶさかではない。

「小学生位まではYSJって毎年行ってたんだけどさ、久々で楽しかったなあ、花開院君は初めてだったでしょ」

「・・・いや」

「嘘バレバレだって、どう、アサミ監修YSJ回り！ ま、3時間位じゃ回りきれなかったから大学生になったらまた行こうね！」

「また行くのか？」

「うん！」

にこっと笑うアサミに一度押し黙ってフンと鼻で笑う

「大学生になったらな、浪人生だったらナシだからな」

「うおう、プレッシャーかけるね」

「お前だけだプレッシャーになるのは。俺は余裕で大学行けるからな」

「ムキー！ 腹立つ!!」

片手だけ振り上げて、勢い良く肩を叩かれるのかと思ったたらアサミにぎゅうつと手を握られた。

「一緒に大学生になる、約束だからね！」

「……………」

「ほら、私偶然花開院君と同じ志望大学だしさ、ね！」

さつきまで笑っていたアサミだったが、今は真剣に竜二を見つめている。

どきつとした。

「大学行って勉強してバイトして、時々一緒に遊びに行くの。花開院君がいないと楽しくないから」

そういえば、と気づいた。

今までゆら以外、未来について楽しく話した奴はいただろうか。

皆、花開院の早世の呪いに遠慮して今は話すが未来について語ろうとはしなかった。

アサミの周りが穏やかにキラキラして……小さい鬼火がキラキラを擬態している。

「…………… 餓狼行け」

思わずペットボトルの水を使ってしまう。

アサミがびつくりして竜二にしがみついている間に、餓狼は隠れていた者達を燻り出した。

「あああ、良い所やったのにいい！」

「演出過多だったんですよ！ リクオ君！」

「大丈夫、写真は撮った！」

「わわわわ！ ギブ！ ギブ！」

ゆら、秋房、パドは抵抗なく（もしくは抵抗する暇がなく）餓狼に噛みつかれ、カメラだけを結界で守った雅次はぐるぐる巻きに水で

縛った状態になっている。

そしてクサイ演出をしたであろう、につくき妖ぬらりひよんの孫は妖怪の姿で塀の上で笑っている。

「せっかくときめき演出してやったのに、餓狼けしかけるなんてヒドイ奴だな」

「妖は黒、滅びろ」

「いや、リア充こそ滅びろだよな」

からから笑うリクオの横で餓狼まみれになっているゆら達は無言でうなづく。

「せや、裏切り者おお！」

「ずるいよ、自分だけ！」

「僕と君の仲だ、事後報告より事前報告が義務だよな!!」

ゆら、パト、雅次は餓狼を千切る勢いで加勢する傍ら、秋房は視線をそらせて曖昧な笑みを浮かべている。

何せ秋房は数日前、百石のことで同じように皆に迫られていたからだ。

その時はリクオがいなかったから今よりはマシだが。

数時間前、リクオが京都にいた小妖怪を臨時雇いにして小百鬼夜行を作り上げ、花開院に向け小行進してから突撃して来て宣言したのだ。

摂政・花開院竜二殿の婚約決定おめでとうございます。 と

昼間の人間の姿で「悪意は全くありません」という笑顔で連続口撃を放った。

早世だからといって妹のゆらの婚約者を決めるのに闘争しながら兄の竜二はそっちのけとはどういうものか。

ゆらが兄を気にしているのに気付いているくせに、兄の婚約者候補が幼児というのはいかがなものか。

「今、竜二殿は己で契りを交わす方と巡り会えた様です。ここはひとつ、皆今まで行ってきた事を振り返り2人を祝福してはどうですか？

あ、狐の早世の呪いは解けましたよ。そのご報告に来たのです」
早世の呪いが解けたと聞いた途端、目の色を変えた者達もいたが、

ゆらが皆の前に出て睨むので頭を下げる。

こうして竜二の結婚が決まってしまった。

「この娘、もう結婚から墓場まで決まってしまってかわいそうな気がするけど・・・まあ竜二がどうにかするだろうからいいか」

秋房は遠くを見ているので、竜二はのらりくらりの妖をひとまず置いて、彼を締め上げようと一歩歩いてぎくりと後ろを振り返る。

「よお、お嬢さん」

いつの間にか後ろにいたアサミの両肩をがっしり掴み、甘露を含んだ笑みを浮かべ紅瑪瑙の瞳が怪しく煌き涼しげな顔をアサミに近づける。

「竜二は口はキツイが優しい男だ。誰にでも優しくはないので誤解される事が多いが、連れあつて共に歩く男としては申し分はない」

混乱しているアサミから、思わぬ事を言われて固まった竜二に視線を向けてフ、と笑いアサミを掴んだ手を少し緩める。アサミは動かずこちらに視線を戻したりクオを見つめていた。

「だが、竜二はちょっと特殊でな、連れ歩く異性ってだけで親戚が叩きのめしに来る。それじゃあ無情だろうってんでさつきコイツの家に大音声で君という婚約者がいるって宣言してきた」

「は?!」

アサミは驚いて目の前の妖をまじまじと見つめたが竜二は再度振り返ってゆら達を見る。

秋房、パド、雅次はバットゆらを指さし、ゆらは両手を振って知らん、知らんと言うという事はゆらが何がしかしゃべってリクオが大行進してきた予想図が竜二の脳裏にひらめいた。

ゆらへのおしおきをずらっと15回思い浮かんだ竜二は悪くないだろう。

「おせっかいなのは承知している。お嬢さんにその気がないなら悪かったから俺が君を引き取ろう。何、志望大学を東京にすればいいだけさ、大学を卒業する頃にはお互い良い思い出って笑いあえるさ」
「へまあ、大学卒業したら竜二の事はけろっと忘れているだろうさ」

アサミ以外の全員にリクオの副音声で聞こえたのは気のせいでは

ないだろう。

真つ赤な顔になるアサミをつい、奪うようにリクオから遠ざけてしまった。

「おおお！ 男見せたね竜二！」

「やるな、竜二！」

ハッと気が付くとアサミを後ろから抱きついた竜二と、それに気づいて更に真つ赤になるアサミに秋房とパドは祝福し、雅次はカメラで良い写真が撮れる場所に移動して連写し、ゆらはなぜか涙ぐんでいた。

「竜二兄・・・立派になって」

「お熱いねえ」

リクオの最後の止めに、竜二とアサミがパッと身を離れたが後の祭り。

その日、花開院では夜を徹してお祭り騒ぎになった・・・小妖怪達によって。

その後、花開院竜二について、花開院歴史書では多くを語らない。なぜか竜二と後の妻アサミのベストショット写真が数枚残されている。

特筆すべきは花開院家のこの時代、なぜかぬらりひよん一族が何度か突撃してきて宴を催し帰っていく事だけは記されている。

新・祢々切丸の攻防

花開院竜二はそれなりに忙しい。

自分から忙しくしているねん、というのが妹ゆらの突っ込みだが自業自得に近い意味で忙しい。

花開院の摂政としての仕事。

陰陽師としての仕事。

大学に行く勉強。

最近できた婚約者（妻ではない！）との逢瀬。

「竜二兄さん、実は分身の術使ってはる？」

「睡眠時間を削っているだけだ」

「何時間眠りはる？」

「1日3時間だ」

「えええ、それって健康害する睡眠時間やわ〜」

玄関で出会った妹ゆらと並び、摂政の仕事をする為に仕事部屋に着いた竜二は固まった。

同じくゆらも固まった。

「お久しぶりです、花開院さん、竜二さん」

「あ、この部屋ちよつと使わせてもらってます」

何故か花開院秋房と妖怪ぬらりひよんの孫奴良リクオが応接ソファアーにいた。

「その後、アサミさんとお変わりないようで仲を取り持ったボクもうれしいです」

「妖怪は悪、滅!!」

「わああ！ 竜二、切れないでええ！ 私が呼んだんだからああ!!」

「竜二兄、ストップ！ 書類が伝票が領収書がああ！」

会って直に茶化す妖に、竜二が問答無用で起爆札を取り出したがゆらと秋房に取り押さえられた。

良く見ればリクオは竜二の机を背にしている。札を起爆したら涙目になるのは竜二とゆらだ。

「秋房！ なんでここにヤツを入れた！」

「いや、ここしか今空いてなくって」

「他の部屋でも良いだろうが！」

「まあまあ」

「俺はお前にまあまあ、と言われるだけで腹が立つ!!」

怒鳴るが秋房なりに、あまり花開院の者達に聞かれたくない事を話したかったのだろうと矛先を収めてテーブルを見て首をかしげる。

「なんだ秋房、コイツに刀を作ってやったのか？」

「頼まれてつい」

頭をかく秋房を見て、リクオから頼まれただろう場面がありありと浮かぶ。きつと美辞麗句と熱意をもっておだてて作ってもらったのだろう。人使いが上手い妖だ。

「だって、1回の出入りで刀がボロボロになるんだよ？」

毎回もつたいないお化けジュニアにめちやくちや怒られるんだよ？」

「上手く刀が使えないお前が悪い」

「上手く使っても限度があるよ。世の中エコな時代なんだよ？ ごみ処分所は有限なんだから」

「竜二、私も刀を作る練習にもなるよ、やっぱりコッチよりリクオ君の方が断然多く実地戦闘しているし」

秋房に言われると確かに刀を作る側としては実際使ってくれる者がいるのは有り難いだろう事は想像できる。

心持ち引き下がった竜二をよそに、リクオは新しい刀をすらりと抜いて見聞している。

「衤々切丸と同じ長さだけど、今回はちよつと重いかも」

「確かに、でもまあ、これ位なら大丈夫」

「今回は前衤々切丸よりハードだよ、鶴の前で木っ端みじんにならない様に嘆願してみた」

「嘆願して強度が増すかな？」

和気あいあいと刀について熱く語っているとゆらがポスンと秋房の横に座って身を乗り出した。

「ここは陰陽師として呪いをかけるのがええやろ」

「呪い？」

「祝福って言ってもええで」

ゆらが自信満々に言い切り、リクオと秋房が首をかしげる。

竜二はこの妹、何かしようもない事を言いだしそうな気がしてきた。

「刀の名前や、名前。強そうで折れない名前を付けなければいいねん」

理解できないリクオは純粹に訊いてみた。

「例えばどんな？」

「新・衿々切丸デラックス」

「は？」

「新・衿々切丸ハイパーでもええねん」

竜二は天を仰いだ。この妹の命名センスは壊滅的に悪い。陰陽師的に。

しかし、ここには陰陽師とは違ったセンスの持ち主がいた。

「名前変えるんだったら製作者の名前でいいんじゃない？ 秋房丸でしよ、ここは」

「え、秋房兄、羽衣狐戦で心折れまくってたで。新・衿々切丸ブラックスが早々折れてまうで」

「あ、そうなんだ。じゃあぬらりひよん丸ってどう？ 強そうでしよ？」

「強そうっていうか、なまくら刀になりそうやで。それなら竜二丸やろ、強そうで堅そうで折れそうにないで」

「なんか、刀を持っていると嘘つきになりそうやイヤ」

「そうやな、それはなりそうやな」

うくと悩む中学生達に、あまりのセンスに遠い目になった竜二をよそに秋房が急参戦してきた。

「時代は新しい刀を望んでいるんだよ！」

「ここはエクスカリバー改でどうだろうか！」

「いや、エクスカリバーって西洋剣じゃなかったっけ。それもアーサー王の時代でしょ。古いって」

「丸って男って意味やろ、ここは次は姫って事で衿々切子ってのはど

「うやるか」

「なんか、江戸切子の親戚みたいですぐ割れそうだ」

「え、前の刀つて男だったんだ？」

「ダン!!」

熱血していた3人は、机の音に気が付き机に脚を乗せている竜二に注目した。

目が血走っている。

怒ってる。

血管がひくひくなくなってる。

思わず口を閉ざした3人に、竜二が顔をあげた。

「新しかろうがバージョンアップしようが、祢々切丸で決まりだ。お前ら・・・」

竜二が懐に手を入れた瞬間、リクオは刀を持ってダツシユし、秋房は懐から結界剣を出し、ゆらは頭を抱えて小さくなった。

「出ていけええ!!」

大音声と共に摂政の仕事部屋の扉と窓が吹っ飛び、爆風と共に男子中学生が笑いながら建物から出ていくのを、花開院の術者は見送ってから部屋をのぞき込む。

「ああああ、書類がああ」

「今日は残業決定や・・・」

「あの、2人共、がんば」

「お前も手伝え」

当主と摂政と式篠城守護者が仲良く仕事をしている様を見て、安堵して部屋を後にした。

リクオ、家出する

今日のゆらは絶好調だった。

カンが冴え、怨霊を退治し、依頼人から感謝の礼をされほくほくで家に帰って来た。

なので、花開院本家の玄関を通り、マミルと一緒に食堂の扉を開け「ただいま、ごはんある〜?」

「悪い、食っちゃまった」

いるはずのない奴の返事に固まった。

食堂には食後の茶を飲んでいる竜二と秋房は良いとして、なぜか妖姿の奴良リクオがいた。そして、リクオは最後のご飯を頼張る。

「ああああ!! 私のおお!! 滅!!」

「ダメだよゆら、冷静にならないと」

「ゆら、夕食ならあるぞ、カップ麺だが」

「私のおお!! 卵かけご飯がああ!!」

「まあまあ」

「アンタにまあまあ、って言われるとゴツつ腹立つわああ!!」

起爆札を取り出したゆらに後ろからマミル、前から竜二が取り押さえに入った。それを横目にのほほんと食後のお茶を手にするリクオに秋房は苦笑した。

「で、何でアンタがいるん? 竜二兄、よくコイツがいるのを許したな
〜」

ずるずるとカップラーメンをすすりながら半目で睨むゆらに、竜二は珍しく肩を落とす。

「まあ、あまりにも哀れというか可哀想というか」

「うん、同情するよね」

「同情するなら説得してくれ」

「無理」

ここにいるワケは他の皆知っているらしく、リクオに同情的な視線を送っている。

ハテナ顔のゆらにリクオはため息一つ、携帯を取り出し見せた。

「……………なんやコレ」

「ほら、俺って元服しただろ。カラス天狗がそれはもう張り切つて奴良組三代目の嫁候補を探した訳だ。その候補の1人」

携帯に映っているのは、こちらを折り目正しく見ている般若だった。

いや、コイツ見たことある奴に似ている。

般若っぽい顔、長い髪、によきつと出た角2本、決めポーズをとっている(らしい)腕6本。

「土蜘蛛子……」

「身長は俺の3倍以上、体重は……シークレットとか書いてあったな」
「……見合い相手?」

遠い目をするリクオに、九州にいるはずの土蜘蛛を思い浮かべたが、彼の一族の女性らしい。マミルの問いにリクオはゆっくり頷く。

「妖怪世界のお見合い……」

「俺は少なくともジジイより年上の妻は認めん。あつちも腕2本はイヤだと言っている」

「そういう問題なん?」

「ジジイも親父も自分より小さい相手が妻なのに、俺だけ超ビッグつていうのも納得がいかん。今ジジイとカラスの奥方とささ美と牛鬼でカラス天狗を説得しているが聞きやしない」

リクオが携帯を操って奴良本家の画像を出した。

良く聞こえないがカラス天狗が木に吊るされており、ぬらりひよんが何やらしゃべっている傍ら、ささ美がムチで、妻の濡鴉がハタキで叩き、牛鬼が真剣で突きをする度必死にかわしている。

「少なくとも、カラス天狗以外はこの見合い、異常だと思っている訳だな」

「俺がいるとカラス天狗が興奮してな。ちよつと騒動が終わるまで家出した方がお互いに良いだろう」

「なんでこんなに意固地になつてるんやろ」

現在の状況を送って来た携帯に皆がのぞき込んでため息をついて

いる時だった。

「ご説明しましょう!!」

元気な声が後ろから響いた。

振り返るとどくろを持った少女とセーラー服を着こなす少女がいた。

「このお見合いはお姉さまが奴良リクオの為に膳立てしたからです。喜べ! 奴良リクオ!!」

どくろを持った少女、狂骨は胸を張る。後ろにいる羽衣狐は楚々と笑っている。

竜二とマミルがゆらの前に出て守る傍ら、リクオが携帯を閉じて前が出る。

「妖術をかけたってワケか、羽衣狐」

「うむ。千年前にぬらりひよん一族に子無の呪いをかけた詫びじや、受け取れ」

羽衣狐は邪気のない笑顔でふふふふ、と笑っている。

ゆらには悪意がないように見えるが、きつと悪意と嫌味満載なお見合いなのだろう。

「なんじゃ? 妾の真意が読めぬのか? 仕方がない、狂骨、説明せよ」

「はいお姉さま!!」

狂骨はどくろを頭の上に器用に乗せると教師よろしく仁王立ちした。

「子無の呪いによってぬらりひよんという妖はたったの2人ぽっち! そして子を生せるのはなんと1人! これは早急に子を作らなくては!」

という訳で1回の出産で雨後の筍の如く子が産める女性を紹介したのだ!

土蜘蛛一族で一番の器量よしを推薦したお姉さまに感謝しろ!!」

あまりな宣言に一同、止まった。

止める間もなくリクオは袈々切丸で羽衣狐を切りつけた。

「ほほほほ、良い良い、照れなくとも!」

「カラス天狗を元に戻せ！」

リクオの豪速連続突きを羽衣狐は4本の尾でいなし、他の尾で時々攻撃するもリクオが躲し、あつと言う間に2人は外に飛び出して行ってしまった。

「まあ、この見合いは狐の悪ふざけだろうさ。そのうちカラス天狗も治るだろう」

「そうか、雨後の筈の数のぬらりひよんか・・・」

秋房がぼつりと呟いた言葉に、皆が無言で想像してしまった。

リクオに似た少年少女が大挙して、なぜか花開院家に押しかけて宴会を開く筈を。

リクオに似た少年少女が押しかけて来て刀をねだって群がる様を。

「参戦だああ!!」

「滅したる!!」

「・・・行く」

「悪夢です!!」

数日後、花開院家と奴良本家に封書が届いた。

長い文章を要約すると「ちよつといたずらが過ぎましたね、もうお見合いをセツティングしませんごめんなさい」と書かれていたとかい
なかつたとか。

妖の宴

花開院ゆらは未成年ながらも花開院当主になっている。

羽衣狐騒動で花開院家の多くが亡くなり、新体制を作っているが日本では有数の陰陽師一家である。

そんな花開院家に一つの依頼が来た。

先祖伝来、この依頼は受けていたのだが感慨深い。

帝が代替わりすると今上で一度、神と妖の宴を開くのだ。その際の護衛が依頼内容である。

東京の皇居にて、ゆらは午前が終わった「神の宴」の後片付けが終わってため息をついた。

「はあ、これはこれでメンドイけど、夜の「妖の宴」っていうのが本当に妖が来るんだったらメンドウやなく」

「来るんじゃないか、妖が」

同じく片づけを手伝った竜二も腕をぐるぐる回してため息をつく。

「え、本気？　だつてさっきの「神の宴」、神様来てへんかったやん」

「神様がひよっこり来るなんてありえないが、妖は気分が乗ったら招かれなくなつたつて来るモンだろう」

「・・・せやな」

ゆらと竜二は「気分が乗つたら聖地になつていても茶を飲みに来る妖」を思い出し苦笑いを浮かべた。

「あいつ、来るかな」

「来るんじゃないか、ただ飯食いに」

「ただ飯、好きな奴やしなく」

「いや、それ以外にもだな」

竜二の視線の先に目をやると、今日の宴の主催者の孫（皇太子の息子）と帝を守る陰陽師一家の当主の中年男が話している。

「神様なんていもしない奴の宴なんて、時間と供物の無駄じゃないか」「いえいえ、これはこれで意味があるんですよ、お父上からお話あったでしょう」

なだめる当主に男の子は口をとがらせる。

「次の宴だって、例の又エとかキツネとかは呼ばないんだろ？」

「呼べませんねえ、なんと言って宴の主旨は親睦会ですから」

「つまらない」

更にむくれる男の子に当主は柔らかくたしなめるが聞いていない。最後には「妖なんているもんか」と文句を言いつて部屋を出て行ってしまった。

2人のやり取りを無言で見ていた兄妹2人は思う。

「妖を否定する人間脅すの、好きそうだよな、アイツら」

「好きや。めっちゃ好物や」

顔を見合わせて頷く。

「来るな、アイツ」

「絶対茶く飲みに来るで、アイツ」

数時間後、帝主催の夜の部「妖の宴」は、2人の予想通り大入りとなった。

今上帝と皇太子、その息子と共に宴の部屋にゆらと竜二が入ると席はほぼ満席。

50席はあろうかという所に大勢の妖がいて、妖気でむせるほどだ。普通の警備員は遠ざけられていて正解だろう。慣れていなければ昏倒する位だ。

今上帝と皇太子は妖が見える眼鏡をかけているので妖の姿がはっきり見えているが、それ以外の者達は自前の靈感で見るとはかない。ゆらと竜二はお手の物だが、皇太子の息子、桐生にはおぼろげな黒い影や異形の者、怪しい雰囲気ですDホラー映画に見えるだろう。

大きな頭の河童や塗り壁、包丁を持った婆さん、色々異形がいる中で美しい男の妖怪が目立つ。

ゆらが見ているのを気付いたのか、手を振ったがこちらに来る気はないぬらりひよんの孫に腹が立つ。

竜二としてもゆらの気持ちは同感だ。アイツ、早くこつち来い、締め上げてやらねば気が済まない。

あいさつに来た妖は、やはりおどろおどろしい見目をまとってにんまり笑いながら桐生を見る。

悲鳴を飲み込む桐生に満足したのか、妖は今上帝と盃を掲げる。この場合の盃は契りを結ぶという類ではなくあいさつ程度のあつさりしたものだ。

「いやいや、なんでも皇太子のお子様は妖はいないと断言しておられたとか。

いないように見せかけるのが昨今の流行りとはいえ、やはり無視されるのは悲しいものでしてなあ。

どうですこの綺麗な羽織、一級品ですよ、この怖ろしさはここぞという時に着るモノでしてなあ」

「怖ろしいまでの羽織ですね、鬼殿。桐生も貴方様の羽織を目にしては忘れはしまい」

「忘れない、それは本当に良き事です」

にんまり笑う鬼に、桐生は青ざめるのを止められない。

先程から、今上帝にあいさつに来る妖どもは皆桐生を怖がらせては喜んで帰っていく。

妖というのは、どいつもこいつも怯え、怖がる様を見るのを好きな奴らばかりだ。

席に戻る妖に、わざわざ来たのはどういう事かとやんわり訊けば、皆奴良リクオから帝の孫が「妖なんていないさ、怖いものなんてないさ」と堂々と言い放っていると知らせを受けて、面白おかしく脅かしに来たと言う。

「脅かし甲斐のある坊主で楽しかったなあ」

戻る鬼にもそう呟かれて、ゆらはため息をつく。

どうしたものだか、と遠くを見るゆらに、桐生がガシッと腕をつかみ揺さぶった。

「え、何ですか桐生様」

「あれ、あれ、あそこ見てー！」

桐生が指さす方向を見ると、大勢の妖のほぼ中央で和やかに見える（が実は脅しあっているだろう）妖達が数人酒を飲んでる。

その数人の中に、今日の騒動の火を放った奴良リクオがいた。人間の姿で。

「いつの間にか、人間が妖の真ん中にいるよ！ あ、危ないよ！」

狸の玉章と河童と土蜘蛛に何やら言って笑いあっている平和な凶にゆらは見えるが、桐生には黒い妖気のただ中に同世代の眼鏡っこがいる様に見えるのだろう。

竜二は眉間にシワを3本にしてゆらを見て顎をしゃくる。ゆらはため息をつきながら席を立った。

妖達はゆらを妨げる事はないが、新たな騒ぎに目を輝かせて注目している。騒ぎを起こす気はないが、こちらに背を向けているリクオの背中に鉄拳を叩き込む位は良いだろう。

案の定、然程痛そうではない顔でリクオが振り向いた。

「イタ、って花開院さんじゃん。こっち来て良いの？」

「妖の分際で人間に変化するのはどういう了見なん？ さっさと妖に戻りい」

「いや、化けても変化している訳でも」

「早く戻りい」

有無を言わさぬ勢いに、リクオはとりあえず妖姿に戻った。

「せっかくリクオ君が妖だらけの宴に花一輪とばかりに人間姿で和ませていたっていうのに気が利かないねえ、帝の孫は」

「人間でも妖でも大差ないだろうが・・・おい、あの孫はまたずいぶん驚いているみたいだぞ」

「あ、本当だ」

玉章と土蜘蛛に言われてゆらが桐生に目を向けると、彼はひええつと驚いていた。

「え、マジでここに人間が一人いると思ったんだ」

「大丈夫か、あの孫」

桐生の驚き様に、皇太子が背をさすって安心させているのが見える。まあ戻ろうかと思ったが、今度は土蜘蛛がゆらに酒を注いだ盃を押し付けてきた。

「俺の酒が飲めねえって言うか？」

のん兵衛3人に囲まれたゆらは、抵抗空しく頂戴した。飲んでから気付いたが用意した酒ではない。明らかに高い度数の酒だ。

次々に酒を注がれ、ゆらが覚えているのは4杯まで。その後は眠くなり・・・誰かに担がれ・・・

目を開けたらリクオのどアップで驚きの声をあげた。

朝の10時頃という、大層遅い時間に雪女に用意された朝食を食べ始める。味噌汁に氷が浮いているのに何故か美味しい。

「いや、ボクだつて驚いたよ。ちゃんと違う部屋に布団敷いて寝かせたんだよ？」

そうしたら朝になってアレでしょ。ゆら、寝相が悪いにも程があるよ」

「下の名前言わんといて！ 違うやろ！ 誰や、布団ごと奴良くんの部屋に運ぶ奴は。黄泉送りかましたる！」

どうやら酔って寝てしまったゆらを、リクオが自分の家に運んでくれたらしい。

運ばれた恥ずかしさと朝のいたずらでの憤怒でゆらは顔が赤くなるのを止められない。

「ゴラ、未成年カップル。責任という言葉を知っているか」

「こちらはなぜかいる竜二も食事をとっている。

「はああ?! 冗談キツすぎるで竜二兄さん！」

「責任っていつてもねえ。あ、そうだ、今日花開院さんの家に行つて添い寝でお相子つて事でどうかな」

「いいわけないやろ！」

「お前、そんなに俺の家にたかりに来るのが楽しいのか」

ああ言えがこう言う。竜二をもってしても、ぬらりくらりのぬらりひよんは堪えてはいないらしい。

更に真っ赤になるゆらを横目に、竜二もご飯をかきこむ振りをしてリクオの笑顔から隠れるしかなかった。

地獄の沙汰も妖しだい

とある早朝、花開院家は日が昇る前から戦闘態勢に入った。

場所はとある井戸の前、有名な「黄泉への入り口」とされるもの前だ。

ゆらとパドと竜二は式神を配置し、秋房は薙刀を持ちマミルと共に最前線に立ち、雅次はいつでも結界術を行使できる態勢で待機している。

「・・・来るぞ」

竜二が眉間のシワを一本多くした所でゆらとパトは警戒心を強く上げる。

「行け！」

竜二の号令と共に、井戸から何者かが出て来た。

「ゆらMAX！」

「ゴモラマル！」

水泡とゴモラマルの鉄拳、秋房の薙刀が何者かに撃ち放たれる。

数瞬後に竜二の言言が放たれるが雅次は目を点にして動きを止めていた。

「いや、みんな、これはちよつと」

「妖怪は悪！ とにかく悪だ！ 黒だ！ 攻撃続行!!」

雅次の後ろにいる陰陽師達も無言で動きを止める。

「ゴモラ行け！ 鉄拳だ！ 鉄拳だ！」

言言とゴモラマルのみ井戸から現れた妖に攻撃を加えるが、初撃を避けた妖はのらりくらりと躲している。

「竜二兄さん・・・ストレス溜まってたんかいな」

ゆらは式神を解除して頭をかく。2人を止める術が思いつかないからだ。

「そういえば御門院家の人達とか、彼に攻撃を避けられてムカついていたって言ってたよね。あの避けられ方はねえ」

「避けるだけなら世界一じゃないか？」

薙刀をにぎりつつ眉をしかめる秋房と静観する雅次の視線の先に

は彼がいた。

関東一の妖、ぬらりひよんの奴良リクオ。

白と黒の長い髪に紅の瞳、表情は珍しく焦った顔になっている。

「なんで攻撃されるんだ？ オイ、やめろって」

攻撃の意思がないらしく、リクオは刀を抜き放っていないが竜二とパトは攻撃を止めない。

そして、間が悪く朝日がこぼれて来た。

妖気が拡散して人間になりつつあるリクオに、なぜか止めを刺そうとする言言にマミルが素早く動いて札で止める。

「止めるなマミル！」

「ありがとお〜」

疲れた顔をしたリクオに、素早くマミルは手を動かした。

頭と顔にいっぱい貼られた「封」の札。マミルの早業でリクオの顔と頭は札で埋められた。

「えっと、なにこれ」

見えないが触って首まで札で覆われた状態がわかったらしい。

マミルは無言でリクオと竜二とパトを見た。

「ケンカは両成敗」

結局リクオはお札で頭が隠れた状態で花開院家に連行された。

花開院家のお年寄りに説教されて解放されたリクオはちよつとむくれていた。

リクオはおじいちゃん子なので、お年寄りの説教はとりあえず聞く子なのだ。

「地獄から帰ってくるのにちよつと使っただけなのに・・・」

「時期が悪すぎや！ 鶴警戒結界作動中やのに」

「いや、まて。お前地獄に行ったのか？」

自分で札を剥がしてグチるリクオに竜二が意外に思っただけで突っ込んだ。

てつきり人間（特に花開院の誰か）を脅かそうとか思ってた井戸から出て来たと思っていたのだが、あにはからんや。

「地獄は散歩先の範囲だよ」

「え、地獄に行つて帰つてこれるもんなの？」

「地獄生まれの妖だと基本浮世は来れないけど、ボクらは浮世出身だからね、行けるし帰れるよ」

人間の物差しは妖とは違うらしい。

リクオは人間として育つたハズなのに、妖世界のお坊ちゃんなので時折常識の行き違いが発生する。

日常生活での行き違いは幼馴染のカナに修正されていたのだが。

「あ、そうか、人間は行き来できないんだっけ」

「行けるがコチラに帰つてこれないな。片道切符つてヤツだ」

「お父さんに会いに行つたんか？」

リクオの縁戚で鬼籍にいるのは祖母と父だけだと聞いているのでゆらが遠慮なく訊くと、リクオは笑顔で頭を横に振る。

「訊きたい？ 訊きたいよね？」

訊きたいけど何を要求されるのか、身構えるゆらの前にリクオは時計を指さした。

「朝食で手を打ってあげる」

朝食に満足したリクオは、食後のお茶をいただきながら携帯の写真を見せた。

はつきり言つて食事時に見る写真ではない。人間らしきものがひき肉団子になっている。

雅次は口元に手を当てて堪えたが、他の皆は興味深げに見るだけだ。

「おい、ゆら。お前も女ならせめて口元に手を当てろ」

「大丈夫や、私は嫁に行かん。婿とりや」

妹の答えに兄として肩を落とす竜二を他所に、ゆらは首をかしげる。

「お父さん、えらい事になってるな」

「だから、お父さんじゃないから。阿部清明だから。ほら、ここに立て札あるじゃん」

ひき肉団子の横に確かに立て札がある『阿部清明の素』と。

「亡者とか地獄出身の妖が地獄から無許可で出て騒ぎを起こすと重罪なんだって」

「ああ、そうかもな」

「陰陽術で隠れてお父さんを殺した罪も上積みされて、地獄の鬼にフルコース折檻なんだって。」

ボクは被害者遺族だから、呼ばれて説明受けたんだよね」

「そ、そうか」

「地獄の鬼って激強だね。鬼童丸なんて抵抗したけど金棒一振りでぺちやんこになってたよ。ボクも避けるのは難しいかな。」

地獄ってひき肉になっても生きているからゆっくり治るんだって。で、治ったらまたひき肉をあと95回だって。

その後阿鼻地獄に2千年落ちて移動はなしで直行ご案内だそうです」

リクオは写真から動画に切り替えて見せる。

こちらは清明を叩きのめす動画で、確かに鬼が一人で金棒一本でつぶしていた。

怖ろしいのは叩きながら「ビザなしで浮世に行って私の仕事を増やしやがって！」とグチを言っている所だ。鬼にとって清明はやっかいな書類仕事を増やしたヤツで、そのストレスを発散しているのだから。

「あと山本五郎左衛門がこっち」

雅次が目を離して本格的に胃と格闘している間に、リクオは違う写真を見せる。

こちらはグロくない。というよりこれぞ地獄という地獄のカマだ。湯気が立っていて見えにくいのが誰かの手だけが見えるので煮込まれているのだろう。

「山本も重罪だから、煮込んで煮込んで、更に煮込んで煮込んでから阿鼻地獄行きだって」

「4回煮込むん？ 煮込む意味あるのかいな？」

「食べる訳じゃないからね、そういう責め苦なんだって」

責め苦と言われれば、ゆらも特にそれ以上突っ込めなかった。

朝食に煮込み料理がなくて良かったと思うパドと秋房の後ろを雅次がふらふらと横切る。限界なのでトイレに行くのだろう。

「本当にお父さんに会いに行かなかったんか？ 今なら会えるで」

ゆらは腕を組んでリクオを睨むと、リクオは苦笑する。

「お母さんが会えないのにボクだけ、っていうのはダメだよ」

「・・・そか。そうやな」

しんみりするゆらに、リクオはいつもの穏やかな笑顔になりそれだね、と続ける。

「閻魔大王に頭を下げられてね、何か償いをつけて言われたから『お父さんが早く償いが終わるようになってください』ってお願いしたの。ぎゅぎゅっと刑期を短くして30年位で出所できますように、って」

「ほお、30年かゝ 多分短いんやなゝ」

「うん、特別報酬だつて」

「でも、お父さんは何の償い？」

「一番はおじいちゃんより早く死んだ罪だつて」

「ああ、それはそうやなゝ」

ぽやぽやとゆらとリクオは和やかに話しているが、竜二と秋房は見合ってしまった。

「今の、裏の意味って・・・」

「ああ、30年たつたら転生させろって事だろ？ 30年といえぱリクオの母さん、60歳ちよいか」

「あの方、その、長生きしそうだよね」

「ああ、70歳以上生きるだろう」

2人はリクオを見る。いつもの穏やかな笑顔だが・・・

「後妻の母より先妻をとつたんだから、もう顔出すなって事か？」

「ああ、良く考えれば昼ドラの世界だな。妖だから丑の刻ドラマかもしれんが」

「こ、怖いよ、リクオが実は怖い・・・！」

2人の会話を聞き、怖がるパトに竜二が優しく肩を叩く。

「ゆらだって気付いているぞ。わかっけてリクオに賛成してるんだ、アレ」

「お互い、妻は1人にした方が無難だな」

「そうだな」

「ボ、ボクだってそうするよ！」

3人の男はゆらを見る。もし3人がその手の騒ぎを起こしたら、ゆらはきつとリクオにグチるだろう。そして、リクオはフェミニニストだ。女性を悲しませた分は地獄で鬼と一緒に制裁に加わる・・・かもしれない。

3人は誓った。決して女性を泣かさないと。

妖の恋愛事情

雪女のつららは家事は一流と自負している。

たとえ氷があろうとも味噌汁は美味しく作り、掃除洗濯もこの道百数十年のエキスパートだ。

そのつららが奴良家の門を掃除する事は珍しい。

たいていは何か怒ってグチを言う時か、リクオが遠出から帰ってくる時にする位だろう。

今回、つららが門を掃除しているのはグチを吐き出すためだった。

「まったく、若もあんな所に行かなくても。せめてもうちよつと近い所に散歩でも・・・いえいえ、家長さんのお家はダメですけど、もうちよつと近い所に」

グチを吐き出している所で肩を叩かれたので振り返った。

「あら、貴方様は」

知らない相手だが、風貌で知り合いの一族とわかったつららは困惑した。

ありていに言えば奴良家と繋がりがまったくないからだ。

「急に申し訳ありませんが、奴良リクオ様は御在宅でしょうか」

「ああ、リクオ様に」

合点がいったが、そこでつららは申し訳ない顔になる。

つららはリクオの側近筆頭なので予定は把握している。目の前にいる相手が事前に会う予定を組んではない者だとはわかっていた。

「リクオ様は予定がないので外出しております、ご用件がありましたら側近筆頭の私が承りますが」

丁寧に頭を下げるつららに、相手は滅相もないと手を振った。

「いえ、ちよつとお話してきたら良いなという程度だったので。では失礼します」

「はい、ごきげんよう」

相手も特にながかりした感じではなかったので、つららは軽く頭を下げて見送った。

もしもつららに雪女以外に、タイムリープの能力があったなら慌て

て過去のつららの頭を叩いて去っていく妖を奴良家に招き入れただろう。

残念な事につららには未来を知る能力もなかった。

つららはのほほんに見送り、グチを続けながら門を掃き続けてしまった。

花開院ゆらは自室で早目に就寝していた。

いきなりだった。

門の方からダンプカーが追突したような轟音と悲鳴、そして異様な妖気。

ゆらはパジャマのまま自室から門へと駆け出した。

まだ寝ていなかった陰陽師の中には、門のなにかと一戦交えたらしく、負傷してこちらに運ばれている者もいる中、ゆらは最前列へと躍り出た。

すでに右手には式神を装着済みだ。

丁度秋房が弾かれてこちらに倒れこんできたのを素早く躲し、撃つ態勢に入った時にこちらを見た敵に硬直する。

「土蜘蛛?! アンタ何しはるつもりか!」

門は跡形もなく食い荒らされ、いまだバリバリと門を食う土蜘蛛に思わずツツコミを入れるゆらに気付いたらしい土蜘蛛が般若の顔に喜色が躍った。

「ゆらー! あなたは花開院家のゆら様ですか!」

「ハ?! 土蜘蛛とちやう! アンタ誰や!」

終始ゆらを「陰陽師娘」と呼んでいた土蜘蛛とは違う言葉遣いに、警戒心を強めるゆらだったが推定土蜘蛛は目に留まらぬ速さで肉薄してゆらに抱き着いた。

「ゆら様ああ! あなただけが、あなただけが頼りなのですう!!」

「ギブギブギブ! 出る、中身が出る、ギブギブギブ!!」

土蜘蛛一族の怪力で抱き着かれたゆらは式神を操るのも解いて腕を叩きまくる。

遅れて来たマミルも無言で反対の腕を叩くが痛い素振りを見せな

い。

「話だけでも、話だけでも、せめて良案があったら良いのでええ!!」

「聞く! 聞くから! 離して! ギブギブギブ!!」

「絶対聞いてくださいね!」

最後にギユつとつぶされて離されたゆらは、一瞬先代花開院家当主に会えた気がした。

とりあえず食堂に案内すると、土蜘蛛つぽい妖は自己紹介してくれた。

「阿蘇の土蜘蛛一族の土蜘蛛美です」

「・・・よろしゅう、私は花開院ゆらいいます。もしかして前に奴良くんとお見合いになってかけた方でつしやろ」

「はい、カラス天狗様からどうしても言われて断れなく、釣書だけ送らせていただきました」

「ああ、災難どしたね」

「異種同士の見合いでしたから、初めから成り立たぬと思っております」

落ち着いてお茶を飲む土蜘蛛美に、ゆらは内心ほつとしながら先を促す。

「実はあの騒動で私も自分の心に気付きました。ええ、私にも愛しい方がいる、と」

「あ、はあ」

色恋方面に話が行くとは思わなかったゆらは、ゆるい返事になってしまった。

「家出していた方なのですが、最近やっと里に居ついて下さりまして。雄々しいお姿を見るともう」

「・・・なあ、マミル君、竜二兄はどこ行かはった」

訥々と話す土蜘蛛美を見ながら、横に座っているマミルに小さい声で問いかけるとマミルはいつもの無表情で応えてくれた。

「夕方頃にいきなり「ちよつと野暮用ができた。帰りは明日だ。いいか、良く学べよマミル」と言い残して出て行った。思えば竜二はコレ

を予期したのかもしれない」

「竜二兄く〜」

水式神以外に占いにも才があるらしい竜二に、ゆらが恨みを込めて名前を呼ぶが負け犬の遠吠え。

誰かこの場に来ないものかと願って扉を見ていたら、不意に扉が開いた。

「よお、なんか門がひどい事になっていたがどうしたんだ？」

扉をあけ放ったのはこれまた妖だった。

白と黒の長髪を妖気になびかせ、紅の瞳に涼し気な顔・・・が部屋にいる土蜘蛛美を見た瞬間引きつった。

「邪魔したな」

一瞬で撤退を決行したリクオに、ゆらとマミルの式神達が襲いかかったのは必然だった。

長い説明を要約すると、土蜘蛛に恋をした、仲を取り持って欲しいという事だった。

勿論土蜘蛛一族の何名かには話を持ち掛けたが、取り持つてはくれなかつたらしい。

彼ら曰く「思いの丈をこぶしに宿せ！ 打ち倒せ！ 勝者の権利を行使しろ！」。ゆらとマミルは何も言えなかつた。妖のリクオも引きつった顔をしているので土蜘蛛一族が特殊なのだろう。

「バレンタインデーまで待てばええ。そこでチョコ渡して告白すればOKやろう」

ゆらは确实安定（結果は未定）な提案をしたが、土蜘蛛美は納得ししてくれなかつた。

「土蜘蛛様は雄々しいお方なので私以外にも狙っている者はいるので。ああ、こんな所で相談している間に誰かがあの方を奪っていくかもしれないと思うと・・・！」

土蜘蛛美がギラリと目を輝かせて手に持っていた茶碗を握りつぶす。

そして、がばりと机につつぶした。

「もうあの方を思うと夜も眠れず！」

「・・・眠らなくてもいいけど机をかじるのはやめてほしいかな」

つつぷした勢いで机をかじって食べる土蜘蛛美に、マミルがツッコミを入れるがストレスで食欲が出るんです、と相手にされなかった。

「ふ、ここは俺が知恵を授けよう」

土蜘蛛美が机をかじり出して一番に遠くに退いていたリクオが自信ありげに腕組をする。

「既成事実で婚約してしまえばいいんだ。アイツ、絶対世間知らずで漢気はあるからな。チョロいぜ」

「既成事実と申し上げますと、アレとかコレとか、いやですわあああ！」

悲鳴をあげながら勢い良く机をかじる土蜘蛛美にゆらとマミルがリクオの後ろに退避してしまった。

リクオは土蜘蛛美の恥じらいに若干冷や汗をかきながら訂正する。

「いや、アイツは世間知らずだからな。額にチューで責任とるって言いだすヤツだ」

「えええ、アレとかコレとか、やらないのですか・・・」

リクオの訂正に少し落ち込んだ土蜘蛛美を見ながら、ゆらはリクオの肩をつつく。

「さすがにそらへんやないか？」

「ヤツをワナにはめて穴に落として、額にコイツがチューすれば良いだけだ。現場を俺と土蜘蛛数人で目撃すれば尚良し。ハハハ、楽しみなだな」

本当に楽しそうに笑いながらリクオは席を立つ。

「よし、思い立ったら吉日。即土蜘蛛の里に行くぞ！ 準備は良いな！」

「ハイ、リクオ様！」

「行くぞ！」

ヒラリと土蜘蛛美の頭に飛び乗ると、土蜘蛛美はムクムクと大きくなり天井をパンチ一発で穴を開ける。

「何するんや！」

「では行ってくる！」

「ゆら様、マミル様、っきげんよう！」

妖2人組は高笑いしながら夜の京都の空へと消える。

「帰ってくるな！ マミル君塩！ 塩持ってきて！ 二度と来るなああ!!」

ゆらは消える二人に思いっきり怒鳴りつけるしかなかった。

土蜘蛛美騒動から2日後の夜、竜二とマミルとゆら3人は見積書にため息をついた。

「とりあえず応急処置の見積もりが来たが・・・土蜘蛛一族が天災でも保険が下りないのが痛いな」

眉間のシワがすごい事になっている竜二に、ゆらマミルは返事することができない。

門と食堂の応急処置の金額が、言葉を奪っていたからだ。

「そういえば、奴良くん家は結構半壊とかしてはるよね、あれってあの家の妖怪達が修理してはるんやろ。あの人材を貸してもらえんやろか」

「昔は家を直すのも住人がやっていた。ノウハウがあるのだろう」

「妖を花開院家に入れるという心のハードルが無ければ、喜んで脅し、いや頼みに行っていたぞ」

おのれ奴良リクオ、と血涙を流す勢いの竜二にゆらは冷や汗を流す。

「そういえばゆら、そろそろ花開院も落ち着いてきたし、復学したら」

マミルはこの一件が終わったと見たらしく、見積書を机に置いてゆらに問いかけて来た。

ゆらも見積書を机に置いて、首をかしげる。

「そろそろ復学しよけと思うけど、家の事考えると京都内がええかな
〜 浮世絵町やとえらいやろうし」

「さすがに当初の目標は立ち消えたからね」

「今後の事を考えると、中学までは浮世絵町に・・・なんだ?！」

竜二もゆらの復学の話題に入ってきた所で異様な気の接近に気付いた。

神気とも妖気とも判断し辛い力の塊が数個、こちらに急接近してくる。

席を立つのと同時に、また門の方から衝突音と悲鳴が聞こえて来た。

「今度はなんだ!」

竜二が勢い良く門の方に向かうのを見ながら、ゆらとマミルは遠い目になる。

「マミル君・・・」

「ゆら、気持ちはわかる。確かめに行こう」

「せやな」

のろのろと部屋を出て竜二の後を追う2人だが結果は想像通り、いやそれ以上にひどかった。

門から土蜘蛛一族数人が建物を食べながら邁進して来る。

立ちはだかる陰陽師には、もれなく手に持つ酒ビンをつっ込んで強制アルコール中毒にしている。

竜二もあえなく真っ赤になって沈没している。

「妖芋焼酎・・・度数高そうやな」

「ゆら、未成年だから飲んじやダメだよ」

マミルの注意がなくても、竜二を見れば飲もうとも思わないゆらの前に妖が陽気に笑って仁王立ちした。

「おお、おぬしがゆら殿だな! 未成年であるだろうから酒はふるまえないが、祝い酒のおすそ分けじゃあ!」

妖が宣言した瞬間、マミルが倒れた。

驚いてマミルを見ると、口に酒ビンが生えている。突っ込まれたらしい。

「土蜘蛛美が土蜘蛛と夫婦になりたいと頑張っていたのだが、ゆら殿とリク才殿が知恵を授けて下さったとか。

あの2人は昨日結納を済ませてな! 報告がてらおすそ分けに来

た訳じゃ！」

「うむ、兄者。この建物美味いぞ」

「さすがは花開院家、酒のアテが美味しいぞ！」

衝撃の告白に固まったゆらの横で、土蜘蛛一族が酒を片手にバリバリ建物を食っている。

「これで土蜘蛛もちいとは落ち着くだろう」

「土蜘蛛美は一族一の器量良しじゃしな！」

「ささ、遠慮なく酒を飲まれよ！　ワハハハ！」

花開院家でゆら以外で未成年なのはパト位しかない。それ以外は皆酒の餌食になって倒れて行く。

土蜘蛛一族が騒ぐのを尻目に、倒れた人間達に水を飲ませてやるしかゆらには方法がなかった。

奴良家では定例の幹部朝食が始まっていた。

リクオはつい先日、ふらりと散歩に出たまま数日帰らなかったのだ、定例会に出られないのではないかと側近達はやきもきしていたが、2日前に二日酔いで帰って来たリクオに心配しつつも安堵した。今のリクオは二日酔いも治り、シャキンと正座をしている。

二日酔いで帰って来た事は幹部達にも知れ渡っていたが、皆ちよつとお小言を言いつつも若い大将の成長に談笑する穏やかさがあった。味噌汁を口にしていたリクオの耳が数人の足音をとらえる。こちらに向かつてくる3人とつららと首なしの足音、そして障子が勢いよく開かれる。

「よお、邪魔するぞ」

器を膳に戻したと同時に現れたのは花開院竜二だった。眉間のシワ数が過去最高な凶悪面だ。

刀を抜こうとする猩影を手振りで抑えていると、竜二の後ろからゆ

らとマミルも現れた。

「朝早くから3人共、どうしたの？ えらく怒っている様に見えるけど」

幹部達も現れた狼藉者達があまりに怒った顔をしているので、様子を見る事としたのか中腰から席に座りなおしている。

ゆらはズカズカとリクオの前に来て懐から紙を掲げて見せる。

「屋敷の見積書？ すごい額だね」

「そこか、そこじゃない所を突っ込んで欲しいのだが」

ゆらの後ろにいる竜二が睨み付けるので、リクオは端の方に書いてある文章に目をやる。

「・・・土蜘蛛一族による天災は保険適用外です。あ、これ土蜘蛛一族がやらかしたんだ」

「ああ、お前がゆらが土蜘蛛美に知恵を授けたって事にした結果がコレだ」

「え、そんな事言ったんだっけ？ ボクも妖芋焼酎を飲まされたから土蜘蛛をはめた後がうる覚えなんだよね」

奴良家幹部はマミルに見せられた見積書のコピーを見て、笑うリクオに感謝の念を送る。もし自分だけでなんて言っていたら、この災厄は奴良本家を襲っていただろうから。

「うちら、家なき子や。責任とつてや」

「え、家ないの？」

「俺達2人は本家筋だからな。秋房達は実家があるからそちらにいる。マミルは護衛だ」

「そっか、困った時はお互い様だし、部屋は空いているからいいよ」
異を唱えずに快諾したリクオに、竜二が意外そうな顔をする。その竜二の前でゆらがパンと手を合わせる。

「ついでに妖の手えも借りたいんや。屋敷ん再建を手伝っておくれやす」

「・・・まあ、困った時はお互い様って今言っちゃったからね、今はこちらも落ち着いているから手伝いもできると思うよ」

「おおきにー」

「つららと首なし、3人を部屋に案内して」

「はい」

障子の外でおろおろしている2人にリクオが声をかけ、3人が外に出るとリクオは味噌汁を再び口につける。

「・・・良いので、若」

不満そうな顔の猩影の横で、呼ばれて朝食を共にしてた牛鬼が問うとリクオは食べ終わった器を膳に戻す。

「恩を売る絶好の機会だ。ゆらはともかく竜二に恩を感じさせるのは良い機会だよ。」

「・・・まあ、こちらの内情は探られるだろうけど、そこは皆頑張ってね」

牛鬼に向ける眼差しは、いつもの穏やかな茶の瞳ではなく、夜を思わせる紅がかかった妖しい瞳だった。

猩影と牛鬼はニヤリと笑い、他の幹部と共に頭を下げた。

ゆらとリクオの学生生活（前編）

妖はとても酒が好きな種族である。

新築祝いに宴会、快気祝いに宴会、新しい仲間が入れば宴会、何も
ない日でも宴会。

理由をつけては酒がふるまわれ、宴会に突入するのは人間以上の熱
心さだ。

花開院家の3人が来た日にも宴会は当然開かれた。

ゆらは死守した代わりにマミルと竜二は遠慮なく酒を突っ込まれ
てしまった。

なんとか竜二は自分の部屋に戻れたが、マミルはどうなったかわか
らない。

翌朝、朝の光が入る部屋で竜二は軽い頭痛を覚えつつ布団から起き
出した。

サイドテーブルにコップと水さしが置いてあったので遠慮なく水
をいただく。こういう気遣いはできるので本気で嫌がる酒は遠慮な
く飲ませる凶太さが妖達にはある。

ため息をついて、ふと掛布団を見る。

黒い何かがある。

悪魔的何かであった。

「わああ?!」

人間は驚きすぎると声だけしか出ない物だと、今日竜二は学んだ。

「アレ？ ああ、竜二さんの所に行ったんだ。奴良家最凶の付喪神だ
よ。脅かし系のね」

「ああ、あやつ、竜二君の所に行ったんか。あの悲鳴はあやつにしか出
せん。気の毒にのお」

「まあ、あの付喪神さん竜二さんの所に？ ビックリしたでしょう」

朝食の席で奴良3人に竜二の所に来た黒いアレの事を聞いたです
と、リクオと若菜は平然と返し、ぬらりひよんだけは同情してくれた。

マミルは頭痛が治らないのでまだ自室で寝ているが、ゆらは元気に

卵かけご飯を口に入れながら黙って聞いている。ゆらも「アレ」が何なのか察しがついたのだろう。突っ込まないだけの分別はあるらしい。

「昨日の宴会で竜二さん、脅かし系妖達と平然と飲んでたでしょう。何としてでも脅かすって息巻いていたからね、最凶さんが登場しちゃったんだと思うよ。」

いつもの彼はおとなしいんだよ。あの形で誤解されるけど、作った職人さんはなすびの皿のつもりだったからね」

「そうそう、ナスのつもりだったらしいわよね。ちよつと個性的すぎる形だけ」

「かわいそうに、彼は一度も普通の皿として使われることなく付喪神になっちゃったけど」

「ちよつと形がねえ」

「皿を最初に手にするのは料理をする女だからな……」

ぬらりひよんとリクオは苦笑いをするが、想像がつく。

あの皿の形はどう見ても黒いゴ○。アレに料理を盛りつけよう等と考える者は皆無だろう。割られなかった事だけでも奇跡に近い。

「今度来たら滅する」

誓いを新たにする竜二の横で、リクオとゆらは食事が終わったのでごちそうさまと言って席を立つ。

竜二は休校届を出しているのだから受験勉強をするだけだが、リクオとゆらは中学2年生、登校時間が迫っている。

「……奴良くん、学校行ってるん？」

「あれ、知らなかったんだ。しばらく前から行ってるよ」

てつきり行っていないかと思っていた花開院家2人は驚いてリクオを見つめる。

「まあ、ワシらは学生生活が終わると思っていただけだなあ」

ぬらりひよんは苦虫を噛み潰したような表情になって肩を落とす。

リクオも苦笑いして部屋から出る。

ゆらは事情を登校の時に聞こうと思いつながら、時計を確認しながら部屋を出た。

護衛達と電車に乗るかと思つたら、車に乗つて学校の近くで降ろされた。

雪女のつららと車の中で口論してしまったゆらは、学校に着く前に事情が知りたくなつてリクオの横に急いで並んで問い正した。

「ちよつと前に我が家に文部省のお役人と教育長と警察署長と校長先生と担任の先生が来てね」

「ほおお〜」

「・・・学校通つてください、つて泣きつかれた」

「なんで？」

あの奴良家に5人の大人が雁首並べてお辞儀をする様を想像してから首をひねる。

リクオとしても、あの時の凶を今一度味わいたいとは思っていないので簡素に説明、というよりわかりやすいだろう目の前の人物を指さした。

校門の前で仁王立ちしている男子学生が一人。

最近見たお坊ちやま、いや皇太子の息子の桐生少年だった。

「彼、僕達の一つ下なんだつて」

「・・・えつと、確か桐生殿下つて皇族御用達のあの学校に通つてはつたよね？」

「そうだよ、転校してきたんだよ」

軽く笑うリクオを見て桐生少年を見る事2度、リクオはともかく殿下はリクオをロックオンしている様に見える。

桐生少年の横や後ろには結構多くの野次馬がいる。

「来たな、リクオ君！ 今日こそ当てて見せる!!」

あと数歩という所でリクオが止まったのでゆらも止まると、それを合図にしたのか、桐生がオーバーアクションで考えるポーズをとる。

3秒後にオーバーアクションでリクオを指さす。

「君は猫娘ならぬ、猫息子だ！」

「全然違います。　　とか初めに会つた時にソレ、言いましたよね」

「あああ！ 欲望が口に出てしまった！ 猫息子なら良いんじゃないかって！ 猫耳とか猫シツポとか、出てくれたら触れるのにい!!」

泣き崩れる桐生を見終わった野次馬達も三々五々散り始めた。

リクオはどうしようか迷うそぶりをしてから、桐生の横を通り過ぎようとして復活した桐生に肩を掴まれた。

「明日こそ、君の妖としての種族を当てて見せる。というか、今日もお昼は一緒に食べよう」

「・・・クラスの子達と食べた方がいいと思うんだけど」

「ははは、400年も待ったんだよ、僕達皇族はこの機会を！ ではまたお昼に！」

清継を思わせる強引さを見せながら、桐生は小走りに下駄箱へと去って行く。

時間を見れば、確かに教室に向かわなければいけない時間だ。

「もしかして、毎日アレやってはるの？」

「1日1回に限定にしてもらったけどね。」

さすがは皇族、かなりの数の鬼の個体名言って確認してくるよ。ボクの頭に角無いのにねえ」

「鬼かあ・・・」

夜のリクオを想像してゆらは苦笑いした。確かに過去の自分はリクオの種族がわからなかった。自己紹介が無ければわからなかったかもしれない。

「鬼種じゃないって前回言ったから、違う妖が出てくると思ったんだけど、猫ねえ」

「リクオ様が猫とか、どうしたらあの貧弱種族に見えるんですか！」

「人間からしたら、鬼以外だったら何でもいいんじゃないかなあ」

ぶんすか怒り気味のつららに宥めて言うリクオの言葉にゆらも納得する。

ゆらも陰陽術師だ。仕事先で鬼の仕業と言えば青ざめるが、猫やネズミの妖が加害者と言えば妙に居丈高に退治を主張する依頼主は数多く見て来たからだ。

リクオの浮世絵町での生活は、桐生殿下の乱入で平和になっている

ようだった。

昼休みになると、桐生は宣言通りにリクオのクラスに現れ、リクオとなぜか突入してきた清継と他クラスメイト達がわいわい昼食を囲んでいる。

それを横目に、ゆらはノートを見ながらため息をついた。

「あああ。英語と化学と数学がついて行けてないいい」

「ま、まあまあ、その内追いつくよ」

「うんうん、頑張つて」

「ノート、コピーしていいから。リクオ君も3日で取り返したから」

ゆらのグチをカナと巻と鳥居が慰めてくれる。

というか、リクオは先程英語の授業で当てられてもスラスラ答えていた。ゆらと同程度の休校率なはずなのに。

「奴良くん、私を置いて行かあった。シヨックや、仲間と油断してたわ」

「勉強に仲間も何もないのよ・・・所詮はライバルって奴よね」

「ゆらちゃん、あと1カ月で学力テストあるよ。がんば」

「1か月後の事より明日の英語の小テストが大変そうだけど」

「この世に英語と化学と数学がなかったらああ!!」

ゆらは学生が必ず言う呪いを吐きながら机に沈没したが、すぐに復帰して弁当を出した。

「おお、ゆらちゃんが弁当を出してきた！自分で作ったの？」

「いつもはパンなのに・・・」

「いや、コレは奴良くんの・・・」

ハタ、と気づいて口を閉じた。しかしすでに遅し、巻は訝し気に鳥居は楽し気に、そしてカナが真剣にゆらを見つめている。

「いやいやいや、奴良くんのお弁当を参考に、自分で作ったんや！」

苦しく繋いでみたが、3人共目が怪しいと言っている。

3人の視線を知らぬ顔とつくろってゆらは弁当を開ける。

開けて中を見ると、そこにあるのは中学生が作ったとは思えない弁当だった。

「い、今は冷凍食品多いんやで。私でもこんな弁当作れちゃうもんや！」

「へえ、ゆらちゃんお小遣い、増えたんだ」

「まあな！ 私はこれでも花開院家当主や！」

3人共、自分で弁当を作らないので冷凍のくんだりで納得してくれたらしい。

厚焼き玉子を口に入れる。言えなかったが美味しい。自分で作るよりも。いや、ゆらは厚焼き玉子の形に成功したことはない。いつもそぼろ卵だ。

それにわかる。コレを作ったのはきつとつららだ。

「え、ゆらちゃんなんで泣いてるの？」

ギョつとしたカナに言われて気付いた。ゆらは泣いていたのだ。

感動の涙？ 違う、これは悔し涙だ。

ゆらは勘が鋭い。この厚焼き玉子につららの宣言を感じ取ったのだ。

『ふふふ、私の厚焼き玉子を食べてみなさい。

所詮アナタの卵そぼろとは比べ物にならない味と食感。

ほーっほっほっほ、これがアナタと私の差よ!!』

人間、いや食を愛する者の差よ、と高笑いする幻のつららにゆらは敗北した。

敗北しつつも厚焼き玉子を美味しく完食した。

「そんなに厚焼き玉子が好きだったんだ・・・はい、じゃあ私のもあげる」

「おおきに」

カナに生暖かい目で見られながらお弁当箱に入れられた厚焼き玉子に、ゆらは食いついた。

これも美味しい。しかし、ゆらは勘が鋭い少女だった。

この厚焼き玉子、わかる、これはカナが作ったものだ。

『ふふふ、私でもこれ位の厚焼き玉子が作れるのよ、え、ゆらちゃんの卵そぼろ？』

・・・がんばー!』

「あ、この厚焼き玉子はあたしが作って・・・ゆ、ゆらちゃん、どうしたの、さつきより泣いているよ?！」

完敗だった。

しかし、ゆらだって負けない。

「いいんや、私は陰陽術師の女、食べ専なんや。こないに美味しく作れなくても良いんや。」

悔しゆうない。これは美味しい物を食べた感動の涙や。悔しゆうない、悔しゆう・・・」

負けてない。

ゆらとリクオの学生生活（後編）

終業のチャイムが鳴り響き、掃除当番以外の者が席を立って教室の外に出ていく中、ゆらは幽霊の様に席を立った。

リクオは相変わらず色々頼まれているようで、クラスから出ていくのを横目にゆらはカナからノートを貸してもらおう。

「はああく、勉強がこない進んでると思わなかった」

「がんばってね」

「ユウウツヤ」

近くのコンビニでコピーをするのに付き合ってもらってノートを返した後、ゆらは一直線に奴良家に帰る。

竜二に隠れる様に部屋に入り、勉強をするがさっぱり進まない。

「大変ですね、お茶でもどうぞ」

ぐったりした所で首無がお茶とお菓子を持って来てくれたので肩に手をやりお礼を言っていると、障子の後ろから見慣れない少女がひよっこのぞき込んできた。

「ゆらさん、そろそろお時間ですよ」

「は?!!」

ゆらは少女を見るが、見覚えのない少女だった。顔等にうろこ状のものがあつ異相なのでココにいるのなら妖の類なのだろうけど強くは見えない。

首無の方は時計を見て慌てて立ち上がる。

「今日は運動公園でしたね、凜子さん」

「そうそう、あらかして初めましてかしら。奴良組白蛇組の白沢凜子です」

出ていく首無をハテナ顔で見送っていると、凜子がいつの間にか、浴衣と帯を手にゆらへと迫って来ていた。

「ゆらさんなら、この手のかわいくて華のある浴衣が似合いますね」

「さき、早く早く」

「は?.. いやいつの間に?!!」

凜子の言葉に呆気にとられている間に、いつの間にか後ろに来てい

たつららに服を掴まれていた。

「私は明日の小テストの勉強が・・・きよわわわ?!」

抵抗は空しかった。

浴衣に着せ替えられたゆらは、凧子に手を取られながら玄関へと向かうと、隴車が用意されていてどこに行くとも告げられずに凧子と一緒に入ってしまった。結構広い隴車の中には首無とリクオがいて2人を出迎えてくれた。

「凧子さん遅かったね。ああ、花開院さんを連れて来てくれたんだ」「どうです、私のコーディネートですよ」

「凧子さんは趣味が良いから安心して任せられるね。ありがとう」

「いえいえ、と盛り上がる2人にゆらがずいといと身を乗り出した。

「奴良くん、これはどないな事や」

「あれ、聞いてなかったっけ。今日は日暮れから妖合戦だよ」

「ハ?!」

「九州で一緒に戦った獺祭を覚えている？ 彼の酒呑愚連隊と」

「ああ、あの酔っ払い・・・」

思い出した酔っ払いの妖とリクオは比較的仲が良かったような気がするが、妖同士ではあるので仲が良からうと争う事になるんだろうと無理やり納得した。

そして、ひっぱり出された理由もなんとなくわかった。

「あんたらが争ったら妖気で私が出張るってわかって連れ出した、って事やろか」

「まあおおむね当たっているかな。良い所でやあやあ我は花開院家の、ってやられると興醒めでしょ」

「あんたらが妖気をばらまくのが悪いんや」

自分でもやりそうなので、ちよつと反論してから身に着けた浴衣を見る。

「妖合戦なんだから、洋服なんて風情のない物はボクの名前が許さないよ。」

花開院さんだって、きちんと恰好を整えれば歩く牡丹になるんだか

「らもつたないよ」

「……………」

「まあ！ リクオ様ったらお口が上手い！」

「リクオ様！ 二代目みたいになっちゃってますよ！」

カチンと赤くなつて固まったゆらの左右でキャーと囁す凜子と突っ込みを入れる首無にリクオはちよつと首をかしげる。

「これってナンパ……いやいや、深く考えたらアカン。こいつは善意の塊、これっぽっちも深く考えずにポロつと言う奴や、考えたらアカン」

ブンブン首を振つて考えを追い出していたゆらの頭にリクオが触る。

「ほあ?!」

「あと、これを着けたら完璧だな」

目を向けると、いつの間にか妖姿に変わっているリクオが右耳の上にかかお面のようなものをつけて来た。

凜子が素早く鏡を差し出してくれたので見ると、そこにはなぜかオカメのお面がある。

「猩影とおそろいだ」

「なして妖とおそろいなん?! 帰る！」

「あ、おい」

パシつとリクオの手を振り切り、勢い良く籠車から出ようとしたゆらにリクオが慌てて追いかける。

ゆらは気付かなかつたが、籠車は既に発車している。空を行く籠車から出ようとすれば人間のゆらは地面に落ちるのが道理なので、落ちかけたゆらをリクオが抱き上げて救うが、これがまたゆらを慌てさせる。

「離せ！ 離して！」

「いやいや、離れたらマズイだろ」

言いながら故意ではないがズルリと落ちそうになってリクオが更に抱き寄せようとするとゆらは身をくねらせる。

数分後、ぐつたりしたゆらと飄々としたリクオが揃って公園に着く

と、そこはゆらの想像と違った場になっていた。

公園の中心に簡単なやぐらが組まれており、その周りにゴザが敷かれ、酒やつまみ、簡単な食事をしている妖と人間が三々五々、隅には屋台があり、こちらで食事が提供されている。どう見ても小さなお祭りだ。

リクオは唾然としているゆらを残してやぐらに上ると、大きな赤い盃を取り出して酒を満たし、ふうつと息をふきかける。

すると盃から桜の花弁が舞う。花弁はゆつくりと会場の上空を漂いながらぼんやりと光りながらゆらり、ゆらりと会場を照らしていく。

妖く美しい灯りの演出に、酒を飲んでいた人間と妖がやんやと拍手をしていると、リクオの隣に男がぬうつと現れた。

獺祭である。

相変わらず酒ツボを肩に背負って酔っ払い気味だが、首無が用意した白い盃をリクオと共に手に取り掲げる。

「合戦の始まりだ」

両大将の宣言と共に、妖合戦が始まった・・・が、ゆらの想像とは違った。

酒呑愚連隊から進み出た者と、指名を受けた者が何らかの勝負事をする。

先陣は大きな男と青田坊の腕相撲だった。

3回勝負で2回勝った青田坊にやんやと喝さいが贈られる。妖からも人間からも。

多分特等席であろうリクオの横にゆらは座り、そつと聞いてみる事にした。

「戦争みたいに妖同士が争う事はマレなんだよ。あの百鬼夜行大戦なんかレア中のレアだったんだ」

ちよつと不機嫌気味に酒を飲むリクオだったが、次に出て来た妖を見てため息をついた。

ゆらも場の雰囲気が変わった事に気付いて慌てて左右を見まわす。「いや、こつう、ヤツラにとっては真剣な事なんだ、真剣なただけど

なあ……。

おい首無、お前がすっかりしていないからこうなるんじゃないかと俺は思うんだが」

「わ、私ですか?!」

主従が言い合っている内に、進み出て来た妖はドドン、と太鼓の音を背にして指名を始める。

「私の相手は……毛倡妓様!」

野郎共のオオオ! という雄たけびにリクオと首無がため息を吐き、ゆらは固まった。

確かに妖は争う時に男女別の概念は無い。無いが男が女に争い事をふっかけるのはどうも見目が悪い。

何も言えないゆらの前に、リクオではない妖が鬼火を使って後方にあつた朧車をライトアップした。

ドドン、という再度の太鼓の音を合図にしたように朧車の御簾が上がる。

朧車の中から怪しい煙があふれ出て来た。

「つららの演出だ……」

ゆらに解説してくれているリクオはちよつと呆れ気味だ。

スつと出て来た妖に、ゆらは茫然とする。

毛倡妓だろう。

髪をきつちり結び、頭にはきれいな簪や笄、櫛で彩られて体は歌舞伎の様な重そうで華やかな着物を纏っている。

いつもの万倍色っぽい毛倡妓に、妖はともかく人間側の声援が凄まじい事になっている。酔っ払いに妖と人間の違いは無いようだ。

「これが噂の花魁の魅力つてもものやろか……」

「元花魁ですから……コレ見たさにアイツら合戦吹っかけてくるんですよね」

「お前が毛倡妓をオトしていたら、そもそもこんな事になってねえ」

頭をコンコン叩くリクオの前で妖と毛倡妓が始めたのは野球拳だった。

5回戦だったが、ぶつちぎりのストレート勝ちを収める毛倡妓。元

とはいえ花魁、酒宴の遊戯にはえらく強いのだろう。

次の妖も毛倡妓を指名、それもストレートに下す毛倡妓にブーイングを飛ばす妖はきっちり首無が仕留めて転がす。

3回続けて愚連隊が毛倡妓を指名し、容赦なくストレート勝ちする毛倡妓はピースサインをしてから臙車に戻って行った。

最後は大将の獺祭が出て来た。

さすがに大将は大将を指名するだろう。多分。

酔っぱらっている獺祭にゆらは不安になる。リクオと首無も不安そうな顔をしている。

「さすがに、大将は大将を指名しますよね」

「するはずだよな、大将だからな」

酔っ払い共だが最初はともかく、最後まで女妖に合戦をひっかけま

い。

獺祭を睨み付ける3人の前で、当人はビシリと指をさす。

リクオの気のせいでなければ、その指は毛倡妓が引っ込んだ臙車に向けられている。

「つらら」

合図と共につららの技が炸裂した。

一瞬で氷の像になった獺祭が内部から氷を壊すと目の前に引きつった笑顔のリクオがいて右手を鷲掴みにする。

「最後は大将同士じゃなきゃ、終わりが締まらないよな。なあ獺祭」

「え、オレお前とヤルのはイヤだぜ。アレだろ、鬼火合戦になるんだろ
う、アレ、苦手なんだよ」

「問答無用」

ドドン、という合図と共に獺祭とリクオが間をとる為に後ろに退く。

獺祭が右手を揮い5個程鬼火をリクオに向けるが、リクオは盃から出でる陽の桜吹雪の形の鬼火。

「不利すぎー！」

桜吹雪が竜の様に群れを成して獺祭の鬼火を消し、上空を滑空する。

最後のあがきとばかりに獺祭が10個程鬼火を向けるが、くねるよ
うに花卉が舞い鬼火が食われた。

ついでに獺祭も食われて男の悲鳴が木霊する。

やぐらの上でこぶしをあげて勝利宣言をするリクオに人間と妖が
拍手した後に宴会へと突入した。

「やっぱり奴良組が勝ちましたねえ」

「徳川幕府の始まりから江戸に根付いた奴良組が負けるわけないで
しょう」

「お酒を飲むだけじゃあ始まらないってわけですかね、はっはっは」

町内会長と副会長に酒を注ぐ首無を見ながら、ゆらはさして帰るか
と腰を上げた所で、どこかに行っていた凜子とつららがゆらの両腕を掴
んだ。

「な、なんや?!」

「もしかして帰ろうなんて考えていませんよね」

「これからが本番よ、帰るなんてヤボはなしでしょ」

がつしり掴んで2人は屋台へとゆらを連れ出す。

見た目は金魚すくいなハズなのに、幻を駆使して逃げようとする金
魚達。じゃんけんでおまけがつくあんず飴をかけて真剣勝負をする
つらら対屋台主。どれも桜の花卉の灯りの下で妖しい楽しみにあふ
れていた。

「見つけた、つららと凜子さん・・・と花開院さんどうしたの?」

人間の姿になったリクオがベンチに座った3人娘に出会った時に
は、ゆらは真っ赤になつて凜子に支えられていた。

「水飴だと思ってたんだけど・・・酒飴だったの、リクオ様」

「ねんねだったのねえ、陰陽師娘」

ふふふと笑うつららの頭をこっんとして、リクオはゆらをのぞき込
む。

完全に酔って寝ていた。

「そっか、じゃあ帰ろっか」

ひよいとゆらを背負って、つららと凜子を促すと2人共あんず飴を
食べながらついてきた。

「籠車でお帰りには」

「いいよ、途中下座だからね。花開院さんは途中で帰らせて勉強させてあげようと思ったんだけど・・・無理だよ、これじゃあ」

「無理でしょうねえ。大丈夫でしょうか、明日の小テスト」

「はははは。まあ、うん」

ずるりと落ちそうになるゆらをよいしょ、と持ち直して3人は帰路につく。

明日の朝に響く悲鳴と放課後にゾンビの様になるゆらを想像しながら。

妖の子育て事情

誰かが呼んでいる気がする。

竜二がうつすらと目を開けると、そこにはのぞき込む妹と友がいた。

「竜二兄さん、やっと起きた。朝食の時間や」

「・・・タイマーが鳴らなかつたのか」

「鳴ったけど起きへん兄さんに、小ものらが気を利かせて私ら呼んで来たんよ」

「竜二、遅い」

むくりと起き上がると、ゆらとマミルは気を利かせて部屋から外に出てくれた。

あくびをしながら着替える間、ふとさつきまで見ていた夢が気になるが、夢という物は目覚めたらあやふやな物になってしまうものだ。ただ、懐かしい夢だった気がする。

今日の朝食は奴良家にいる皆でとるスタイルだ。

大部屋の障子は開け放たれて、心地よい風と和風庭園を見ながらの朝食は昨今の日本の朝食風景から隔絶したものだろう。

奴良一族も今日はこちらで、竜二達客人の横にいる。

竜二は半分庭を見ながら箸を進めていた。

「今日は一日何するの?」

「・・・勉強や。どこかの誰かさんが邪魔しなければ小テストの追試を受けへんかつたのに」

「ハハハハ、一応家についてから起こしたよ?・・・くしゅん」

なごやかなゆらとリクオの言葉の最後、リクオのくしゅみやみで場が静まり返った。

何だ、と庭から食卓に視線を戻すとゆらとマミルと奴良家以外の者達が全て驚愕の表情でこちらを見ている。

「リクオ様! い、今、今くしゅみやみしませんでした?!

ズサつとリクオの前に走りこんで来た首無の手がワナワナ震えて

いる。

「いや、ちょっとくしゃみやみがしたかったただけだか」

「二二二」大事だああ!!」二二二」

叫び声と共にリクオの姿が竜二達から見えなくなる位に妖達が詰め寄ってきた。

「風邪ですか？ お熱ですか？ 腹痛はしませんか！」

「きつと昔と同じく妖気の中てられてしまったのですよ、おいたわしい！」

「お薬だ！ お薬だよ！」

「その前にお布団にお運びしなくちゃ！」

「うわああ?!」

妖達の絶叫の後、あつと言う間に小もの達に持ち上げられてワツシヨイワツシヨイと掛け声と共にリクオが姿を消えた。

「えらい事じゃああ！ まだ14歳なのに、二代目にどう申し上げれば！ 大変じゃああ!!」

小もの達の後を巨漢の一つ目男が叫びながら部屋を出て行ってしまふ。

騒ぎがリクオの部屋へと移動したので竜二達が大部屋に視線を戻すと、そこにいた妖達が全ていなくなっていた。

いや、まだ一人いた。背が高くがっしりした男が。

「まずはゆっくり考えなければ。リクオ様の目は充血がなく、お体もしっかりしていた。頬が赤くなっただけならお熱も然程あるとも思えん。お声もかすれる事なくいつもの様子だったのでお疲れが出たのであろうな」

長々と独り言にしては大きな声でリクオの状態を言い続けた後、パンパンと手を叩くと庭に2人の男が忍者の如く現れて頭を下げる。

「牛鬼様、 お呼びで」

「馬頭丸、 お前は近くの薬局で一番高い栄養ドリンクを3本買ってこい。」

牛頭丸はハーゲンダツ○のバナラとストロベリーと期間限定の何かを1つずつ買ってくるんだ。行け」

「ハ！」

素早く消える2人を満足そうに見て、牛鬼と呼ばれた男はゆつくりとリクオの部屋へと姿を消していく。

「まあリクオったら、体調悪かったのかしら」

「いや、リクオは悪くはなかったぞ」

「もう、みんな過保護なんだから」

「過保護だな。まあ後で見に行くか」

「まあ、おじいちゃんも過保護ですよ」

騒動を動じる事無く見ていた若菜とぬらりひよんは世間話の様に妖達の騒ぎを評して食事を続けている。

マミルはともかく、ゆらも無言で見て食事をしていたが、最後のおしんこを食べ終えて呟いた。

「奴良くん家って大変やな」

「・・・でもどこかでこんな風景見た気がする」

「そやろか」

マミルの言った通り、竜二もどこかで見た風景・・・な気がする。

惚けてしまったが、今日は竜二にもやるべき事がある。ちろり(他称ギロリ)とゆらを見ると、ギョっとしてこちらを見るなんていじめ甲斐のある妹だ。

「わかつているな?」

「ヒィ?!」

「花開院家の名を名乗るものが小テストとはいえ追試など・・・今日はビシバシ行くぞ!」

「ヒェ?!」

「返事はハイか応かイエッサーのみだ!」

「ハイ!」

元気の良い返事がしたので竜二は機嫌よくうなずいた。

「今日はスペシャル英語テキストで勘弁してやろう」

「うえええ」

「竜二、それってきつと勘弁になってない」

マミルの制止を振り切って、青ざめるゆらを引きずって竜二も勉強

用に借りた部屋へと去って行く。若菜はにこやかに、ぬらりひよんが気の毒そうに3人を見送った。

「やっど・・・やっど半分終わったあ」

「もう少しで昼飯だな。遅いぞゆら」

「遅いと思うなら勘弁してや」

ぐったり机にダウンしているゆらに、マミルがうちわであおいでくれている。

ゆらの頭は英語でヒートダウン寸前だった。その代わり次の追試はなんとか行けそうだが。

「昼食の前に奴の顔色を見てくるか」

「そやな・・・竜二兄さんも優しいトコロあるんやなあ」

竜二の言葉にゆらは柔らかな表情をするが、マミルは無言で頭を振った。横に。

「ふ、俺の予想では奴は今とんでもない事になっているぞ。その見物だ」

「え、ここって奴良くんの家やろ。奴良くんにひどい事あるわけないって」

凶悪な顔で部屋を出る竜二に、ゆらとマミルがついていく。奥の方にリクオの部屋があるが近づくとつれ暖かく・・・いや暑くなっているのは気のせいではない。

リクオの部屋の前では先程の忍者もどきの男が2人、座っている。特に何もしてこないで竜二は障子を開けた。

予想通り、リクオは部屋の真ん中に敷かれた布団の上にいた。正確には座っていた。

予想外なのは奥にいる一つ目の男が松明を持っている事と廊下側に雪女のつららが得意の雪風吹3秒前のポーズでいる事位か。

「リクオ様には温まっていただかなきやなんねえんだ！ ファイヤー！」

「こんなに暑かったら体に毒よブリザードオー！」

一つ目男が松明から炎の息を吐き出して、つららが吹雪の吐息で鎮

火している。温度的には炎が優勢になっている。

「二ツ目入道もつららも、落ち着こうよ」

間にいるリクオはなんとか止めようとしているようだが、彼には第三の刺客がいる。座っているリクオの隣にいる、先程牛鬼と呼ばれていた男がアイスクリームカップを片手にリクオに迫っていた。

「ささ、あやつらの事は気にせず、今は若のご静養が大事。若は昔からイチゴ味がお好きでしたね。はいどうぞ」

「牛鬼、今はそれどころじゃ」

「ささ、この気温では溶けてしまいますぞ。なんでしたら私があくんをして進ぜましょうか」

「・・・わかった。ありがとう、いただくよ」

苦笑いをしながらリクオが牛鬼からアイスを受け取ろうとしたが、牛鬼はさつさとアイスをスプーンですくって無表情のままリクオの口に持つて行った。

その瞬間、竜二が障子を閉めた。

「……………」

無言で頭を下げる牛鬼の（多分）配下に免じて3人共無言で食事をする部屋に行くと、すでに配膳がされている。

せつせと運んでくれたのは若菜だった。

「あら、リクオと一緒に来るかと思っただけだ」

にこやかにごはんをよそって渡してくれるのをありがたく受け取る3人だったが竜二とマミルは武士の情けとばかりに口をつぐんだが、ゆらは違った。

「行ったんやけど取り込み中やったんでお先に来ました」

「そう、じゃあ私が声掛けに行ってくるわ」

「いえ、この首無がシメに行つてまいります」

「そう？　じゃあよろしくね首無君」

誰をシメるのか、ちよつと想像してしまうが3人は関わらない様に口をつぐむ。首無が部屋を出て数分後、男の野太い悲鳴と少女の悲鳴が聞こえた気もするが。

昼食後、相変わらずのスパルタ教材に悲鳴をあげつつもマミルの応

「あれをどうしろと」

「竜二さんなら止めてくれると信じてたのに」

「自分でやれ」

部屋につくと、配膳がほぼ終わっており、今回も客人という事で奴良一族の近くに席を設けられている。

皆でいただきます、と手を合わせ食事をする風景は、昨今の食事情景からすると珍しい類だろう。

朝食の時より数が多く見えるのは、寝坊な妖がいたせいだろうか。

竜二は職業病か、早くに食事を終えて最後のお茶を飲んでいると首無がお便りです、と封書を竜二に差し出した。

受け取って後ろを見ると京都に残してきた雅次からだ。

「あ、雅次兄さんからや。なんて?」

「・・・予定より早く工事が進んでいるそうだ。青田坊がシヨベルカー顔負けらしいな」

「青田坊、すごいでしょ」

聞いていたリクオが笑顔だ。こちらとしても早くに終わる事に越したことはないので曖昧に頷きながら妖達の報告もする。

「河童は平地に均すのが上手いみたいだな。皿に水が無くなるとへたるみたいだが・・・ゴホン」

瞬間、騒ぎがいきなり止んだので竜二が手紙から顔をあげる。

奴良一族とゆらとマミル以外がムンクの叫びを体験している様な恰好で竜二を見ていた。

手前にいた首無が震える手を前に突き出す。

「い、い、今、竜二さん咳をしました?」

「・・・ああ、それがどうした」

嘘を言う場面ではなかったので正直に答えた瞬間、竜二は妖達に囲まれる。

「風邪ですか? お熱ですか? 腹痛はしませんか!」

「きつと昔と同じく体調を崩されたのですね! ざまあみ・・・おいたわしい!」

「お薬だ! お薬だよ!」

「その前にお布団にお運びしなくちゃ!」

「うわああ?!」

あつと言う間に小もの達にワツシヨイワツシヨイと担がれて竜二は運ばれて行く。

ゆらとマミルの視界が晴れると、大広間には奴良一族と幹部数人が残っているだけだった。

残っている一ツ目入道がスツクと立ち上がる。

「これは一大事だなあ。お客人に何かあつたら二代目に顔を向けられん。火鉢じゃな」

一ツ目入道の言葉につららがス、と立ち上がる。

「何言っているんです。お風邪には冷たい氷嚢と氷柱と暖かい布団ですよ。これだから大昔の妖は」

「なんだと」

「なんです?」

「フン!!」

火花を散らしてから2人共駆け足で広間を出て行った。おそらく竜二の部屋でまたバトルが始まるのだろう。

牛鬼は何がしか、配下2人に命じた後にゆっくりと広間を出ていく。

ゆらとマミルは黙って事の成り行きを見ていたが、ちよつと気の毒になったゆらがリクオに顔を向ける。

「大丈夫だよ、気の良い奴らだから竜二さんを困らせる事はするけど、殺しはしないよ」

「そうね、みんないい妖よね」

「気の良い奴らだからな。心配ならちいと見てくるとエエ」

「・・・そうやな。おじいちゃんと奴良くんのお友達やもんな。皆悪い事せえへんよな」

奴良家一族はのらりくらりと返事をするので、ゆらもまあ少ししたら見に行くか、という気にさせる。

マミルは黙って頭を横に振っていたが、マミルはゆらの護衛。

食事が終わってひと時を過ぎしてからゆらとマミルは竜二の部屋

へと赴いた。

障子を開けると竜二の布団が部屋の真ん中にあり。窓側には火鉢、廊下側には氷柱が置いてあり暑いのか寒いのかわかり難い感じになっている。

部屋の主の竜二は、牛鬼に栄養剤を口に突っ込まれる所だった。

「何、貴殿が幼い頃に体験した懐かしき時を我らが忠実に再現するの
も手かと思ひましてな」

ズボンと栄養剤を口から抜いた牛鬼の目にあふれているのは生暖かい視線だった。

「私は親にはなつたことはございませんが、リクオ様を皆で育てた経験があります。さ、寝ていなさい」

「呪詛で体を縛って寝かせるのは子育て経験とは言わん！」

「おやおや、恥ずかしがつて抵抗する貴方様に、我らのとっておきの子育て秘術でございますよ。」

リクオ様みたいに素直であつたらこの様な真似はいたしませぬが「ぬかせ！」

「なんでしたら子守歌を歌いましょう。呪詛に聞こえるかもしれまぬが、そこはご容赦の程を」

「やめろ！ ゆらマミル！ こいつを止めろ！」

止めろと言われても、ゆらとマミルは牛鬼に危険性を感じなかつたので牛鬼の向かいに座る。

牛鬼が歌いだす子守歌は低いバリトンで、呪詛というより本当に子守歌であつたし。

ゆらは眠くなつて目をつむりつつ、この歌はどこかで聞いた気がする。

遠い昔、そう、遠い昔。爺様がゆらを抱きながら、あやしてくれた様な遠い懐かしい時間に。